

2022.5.21

－鎌田先生の問題提起－

「世阿弥と利休を比較しながら考えていくと、
激動の乱世や戦国時代の中で、どのようなクリエイティブが可能なのか」
に答えない その1

高岡 良行

(考案、問)

- ・世阿弥は、リアリズムと神秘主義・秘教（ミスティシズム・エゾテリズム）の両極を行き来しながら、明確な「観念論的な理論枠組み」と、それを参照軸としながら、極めて臨機応変にその場で組み立てていく「臨床実践」の両方を実に大胆かつ勇猛果敢にやっけてのけた。
- ・世阿弥と利休を比較しながら考えていくと、激動の乱世や戦国時代の中で、どのようなクリエイティブが可能なのか、その可能性のありようを実例付きで示してくれている。

(答)

- ・これまで私は、日本文化における茶の湯の立ち位置、その指向しているものと基軸をなしている思想を知り、自分と現代におけるその意義を考えることが目的でした。そのため、そこからさらに踏み込んだ「クリエイティブの可能性のありよう」を考えるためには、より深い思索が求められると考えています。ここでは、その準備のための整理をしたいと思います。まだお答えには遠いですが、考察の一助になれば幸いです。
- ・世阿弥と利休の相違、とくに「違い」については先に下図を作ってみました。鎌田先生の「世阿弥と利休を比較しながら考えていく」という公案を考える上では、「違い」よりも「両者に共通するもの」がヒントになると思います。

世阿弥と利休における立ち位置の相違（私見）

2022.2.15 高岡
2022.4.26 加筆
2022.5.2 改定
2022.5.13 改定

階層	世阿弥	利休
振る舞い	演者として、作品において座の上での雰囲気に応じて 以和為貴	場やシチュエーションによりアドホックに振る舞う 和而不同
マネジメントルール	座として自分の芸で責任を果たす +一座の中での役割を意識する	場は意識しているがルールはない 自分の美意識に従う
場での立ち位置役割	演者と観客	亭主と客 響応、亭主はもてなすのみ
活躍の場	舞台 虚構の世界	広い意味での茶室 日常の中の虚構性
伝記	自著	他人による茶会記・日記 後世の著述 逸話
業	10代から世に出た 役者、座長	茶頭職（家業ではなかった？） 趣味の延長 家業は別に考えていた
フィロソフィ	美意識 幽玄に代表される美	美意識 いわゆるわびの茶

同じような場面であっても対応が異なる逸話があるシチュエーションの違い（年代の違いもあるが）

亭主相伴はなくはないが「主人+響応役」⇒「亭主」

現在の侘び茶像は江戸初期の人々が描いた理想像か？

活躍したのは60代の10年間

考えていたのは茶頭職の世襲化ぐらいか？

京千家：茶頭職の世襲
堺千家：家業+茶頭職の世襲

鎌田先生のおっしゃる
乱世のリアリズムと神秘主義と深く関係

- ・余談ですが、世阿弥と千家は全く関係がないわけではないようです。
 - －善竹は世阿弥の娘婿
 - －禅鳳は禅竹の孫
 - －三入は禅鳳の義甥
 - －三入と宗恩の子が少庵（千少庵、千家第2代）
 - －少庵と利休の娘の子が千宗旦（千家第3代）
 - －宗旦の息子が三千家となる
- ・血縁はなくても宗旦ぐらいまでは、思想的につながるものはあるかもしれません。
- ・1970年代の後半だったと思いますが、永島福太郎先生とお話していたときに「現代から振り返ると400年前に創られた文化の大きな山脈（能や歌舞伎やいけばなや茶）が見える」という意味のことをおっしゃっていたことを覚えています。それは日本では中世以降文化的な大きな創作はなされていないという意味だったと理解しています。
- ・このことから、激動の乱世や戦国時代の方が比較的平和な時代よりも文化の創造性が高いのではないかと思います。この点で鎌田先生のご示唆は的を射ているのではないのでしょうか。
- ・乱世では、仙人か世俗の人かというステレオタイプではなく清濁合わせ飲むというタフさが求められ、動物としての生きるための本能も含めた強靱な精神が必要であったと思います。激動の時代であるがゆえに生き残らなければという強い思いによる集中力、その

反面としての心の安寧平和（癒やし）を欲することが、創造性を解く鍵になるかもしれません。

- ・以下、とりあえず利休の立ち位置について考えたいと思います（まだ書きかけですが、、、）。
 - －ただ、利休の影響が色濃く直接的に残っていたのは孫の宗旦までで、その子どもたちが仕官し三千家となったのちはそうではないと見ることができます。この時期に主格は茶人から茶家になったと考えます。
 - －同時に、今残っている伝書の多くは江戸時代のもので、利休を神格化する傾向があり、できるかぎりこのようなバイアスを除くことができればと思っています。利休存命期の伝書においても、筆者にとって都合の悪いことは書かない、誤解を与えるように書くなど、見えない部分で神格化は進んでいると見ることはできますが。。。

1. 利休の基本的なスタンス（できるだけ逸話によるものを除いて）

- ・最初に利休の基本的なスタンスを確認したいと思います。

(1) 「乱世において」刹那刹那を大切にする。

①今を楽しむ、もちろん明日につなぐ。

- ・死ぬまでに何をするか、如何に死ぬかという、禅宗の思想の影響があると考えます。
 - －宗旦の「今日庵」につながる思想。

②パッション、たぎる心（ぬるきを嫌う）。

- ・これも上記同様、禅宗の影響でしょう。ただ、利休のバックボーンは禅宗だけではないと考えます。
 - －「和敬静寂」や「一期一会」という意識を利休自身は強く持っていたと見ることはできると思いますが、概念としてまとめられた（四字熟語になった）のは後世だと考えます。

(2) 立ち位置は、実践者であり、プロデューサー・ディレクター。この点では、世阿弥の立ち位置に似ていると思います。

①茶会の趣向。

②趣向を表現する茶道具。

③趣向を場とする茶室を始めとする環境（雰囲気）。

④点前を始めとする接遇

(3) 過去の事例にとらわれない、新しいことをしてみる。

- ①主人+饗応役 ⇒ 亭主ひとりに（亭主自身が饗応役となる）
 - ・本膳料理（極端な例では23膳）から懐石料理（一汁一菜）に。
 - ・饗応の中心を呈茶に。
- ②書院茶の名物道具（唐物）重視に拘泥しなかった。
- ③同様に台子にはとらわれなかった、運びの点前。
 - ・五十段、百段と言われる台子の点前の種類が、千家では少ないように感じる。
- ④「山を谷に」、宗二記。

2. 利休におけるリアリズムとはなにか

(1) 自分の美学を為政者を使って広める。

- ・武野紹鷗や今井宗久（信長）に倣い、秀吉の側近となった。
 - －また若い時期を見ると、1人目の妻は三好家からもらっています。
 - －顕著な活躍は60歳から70歳までの10年間で、それは秀吉の茶頭職となった時期です。
 - ＋ここでは大名や豪商との人間関係、人脈を築いています。
 - ＋一定の権力も手中に収め、秀長に「外のことは秀長に、内のことは利休に」と言わしめています。
- ・為政者の所望に従って創作活動をして、自分が見出した（目利きした）道具立てを権威を使って広める動きをしています。
 - －茶室：妙喜庵待庵、黄金の茶室。
 - －安土桃山城の瓦を焼いたと言われる楽長次郎の手による楽茶碗。
 - －禁中茶会や北野大茶会のプロデュース。
- ・自分が見出した美に価値をつける
 - －為政者が褒美として分け与える領地がない⇒名物道具を与える⇒目利きした美の提案⇒利休の茶会に招かれる名誉。
 - －売僧の頂上。

(2) だけど為政者にはへつらわない。

- ・赤と黒
 - －秀吉が嫌った黒。折敷、楽茶碗。

－赤は雑なる心なり、黒は古き心なり。

・古溪宗陳送別茶会

－秀吉に流罪とされた古溪和尚の送別の茶会を、秀吉から修理を頼まれていた軸を掛けて、大阪城で催した。

・堺での蟄居

－秀吉は北政所経由の赦免願いを期待していた？

・1ヶ月後、秀吉が「利休流がなつかしい」（やっぱり人たらし）。

・乱世から治世への流れにはそぐわなかった。側近体制から官僚体制への流れの中で。。。

－宮本武蔵

(3) まだ家業ではなく、人としての世襲。

・道安：堺千家（本業＋茶頭）

－茶の実力は認めていた。

－反りが合わなかったよう、利休に似た性格だったのでは？

・少庵：京千家（茶頭）

－堺千家との軋轢を避けた？

－秀吉の意向で茶に関する財産は少庵（宗旦）に。宗旦を経て三千家

3. 利休における神秘主義とはなにか

(1) 癒やし、和み

・楽しませる、厳しい現実に対する癒やし。

・「亭主と客」は「舞台と観客」と相似。

－亭主はもてなす側に徹する（亭主相伴はあるが、例外的）。

・点前に、道具に、茶室に、茶庭に、茶会に（懐石）。

－点前は軽く、立て板に水（いつ始まっていつ終わったかわからない、vs 宗及の姿）。

＋間、静寂、話術？

－道具

＋先人のものを洗練＋新しい創造。

＋利休形。

(2) 感覚のシャープさ、研ぎ澄まされた感覚

- ・趣向は、作為を感じさせない自然さ、一方で新鮮な驚き。
- ・道具は、へんてつのなさ、簡素さ、無駄のなさ。
- ・疲れない、気楽さ。

- ・見方を変えると、「二つの自然による癒やしと驚き」+「禅宗に裏打ちされた今を生きる心意気」。
 - i) ものの美 (ちょっと逸話から)
 - +石の高さ。
 - +なされるものの美、移ろいゆくものの美：下地窓の竹。
 - ii) 行動の美
 - +筋書きがない。意外性。
 - +簡素、(筋書きがないとかぶりますが) 自然さ。

以上